著名人が語る「私のリビング・ウイル」

TBSラジオ・ラジオ大阪「MyLIFE! MyCHOICE!!」（日本尊厳死協会提供）から

昨年秋から毎週、著名人にご登場いただいて、人生の最終段階や死生観などについて20分ほど、ラジオでお話しいただいています。今回は女優の柴田理恵さんとシンガーソングライターのなぎら健壱さんのお話を掲載いたします。聞き手は元TBSアナウンサーで現在フリーアナウンサーの安東弘樹さん。

（構成／会報編集・郡司　武）

【インタビュー】女優

柴田理恵さん

「最後は地域に貢献しながら暮らしたい」

安東　相変わらずの笑顔ですね。まず、芸能界入りのきっかけからお聞きします。

柴田　高校の時に「芝居っていいな」と思って、住んでいた富山に来る劇団をいろいろ見ていましてね。郷里の八尾町の奥に利賀村ってあるんですけど、そこに東京の早稲田小劇場の人たちが合掌造りの劇場を建てたらしい、と聞いて見に行ったんです。そこで白石加代子さんを見て「うわあー、なんて素敵なんだ、この人」「絶対、東京に行こう」と思って東京に出て、大学で4年間、学生演劇をやりました。

安東　卒業してからも演劇を続けたんですよね。

柴田　OLさんになるという想像がつかなくて。「3年間だけ芝居をやらせてください」と親に言って、佐藤B作さんの劇団東京ヴォードヴィルショーに入ったんです。3年くらいいましたね。

安東　その後、久本雅美さんらと「ワハハ本舗」を立ち上げたんですね。

柴田　そうです、そうです。その頃は、この世界でご飯を食べられるとかテレビに出るなんてまったく思ってもいませんでした。

「正月に一緒に酒を飲む」を目標に

安東　ご両親の反応はどうでしたか。

柴田　最初は大反対ですよね、ひとりっ子でもありましたし。うちは母が教員なんで、「国語の先生の免許取るから」ってウソついて。親は最初「まあ、3年間なら」と渋々でしたが、その後「ワハハ本舗」をやるとなった時は絶望してましたね。

安東　ハハハ、絶望ですか。

柴田　それでもずーっと「帰ってこい帰ってこい、帰ってきて就職しろ」でした。30代後半になって、やっと諦めてくれたかなあ。

安東　テレビに出るようになってからですかね。

柴田　そうですね。

安東　「ワハハ本舗」も大きくなり、ご両親もご覧になりましたか。

柴田　ええ、見に来ました。父は「これは何を意味してるのか」みたいなことをアンケートに書いたりしてましたけど、母は大喜びで投げ銭したりしてました。

安東　そうでしたか。ま、ご両親も認められたということですね。

柴田　そうですね。

安東　そんなお父さまですが、2016年に亡くなられました。

柴田　89歳でした。急な別れだったんですよ。体調を崩して入院したんですが重篤ではなかったんです。亡くなる日の午前中も母が行って、甘く煮た栗を一緒に食べ、「美味しい。お前のもくれ」と言って食べたそうです。そして母が帰って1、2時間後くらいに容態が急変し、亡くなりました。母は、好きな栗を食べて苦しまずに逝った父に「あっけらかんと逝ったお父さんの死に方はいいよ」って言ってましたね。

安東　でも突然の別れですよね。喪失感は大変でしたでしょ？

柴田　母はずーっと一緒でしたから大変な喪失感だと思いますね。父のことは亡くなっていろいろ思います。富山で行きたかった飲み屋さんがあって、勇気出して入って「初めまして…」って言ったら、「お父さんはよく見えてましたよ」と言うんです。「酔っぱらってご迷惑かけてたんじゃないですか」と言いましたら「いやいや、会社の後輩の人たちを連れてきて、不満などをよく聞いて相談に乗ってましたよ」と言われたんです。そんな父の知らなかった面を亡くなって初めて知り、ちょっと嬉しかったですね。ただの酔っぱらいじゃなかったんだと。

　それから地域のシルバー人材活用のような仕事も立ち上げて、地域のために活動してましたね。

安東　そうでしたか。お母さまはお

元気なんですか。

柴田　1年ほど前まで一人で頑張ってたんですけど、その後、体調を崩して今は入院中です。93歳ですね。

安東　5、6年は1人だったわけですね。

柴田　そうですね。父の1周忌の相談してる頃に高熱を出して体調を崩したんです。病院に行きましたら、「えーっ、こんなに一気に老けるんだ」と思うくらいになり、私のこともちょっとよくわからないような状態でしたね。お医者さんには「延命措置はしますか」みたいなことも聞かれました。

安東　どういう返事をしたんですか。

柴田　ずっと以前から「延命治療みたいなのはやめてくれ」と言われてたので、正直にそう答えました。そしたら「心臓マッサージはどうしますか」とかいろいろ聞かれ、「これは本人の意思なので」と答えましたね。その後、母も少し元気になり「理恵?」ってわかりましたので、「あ、お母さん、何したい?酒飲みたかろう?」って聞いたら「酒、飲みたい」って言うんです。なんか具体的な目標を持たせてあげたいと思って聞いたんですね。

安東　なるほど、当面の目標を作ったんですね。

柴田　その時は10月でしたかね。それで正月に富山に帰ってきたときに「一緒に酒を飲む」ことにしたんです。そしたら意識もはっきりし、頑張ってリハビリもして歩けるようになり、正月に実家で酒を一緒に飲みました。大したもんですよね。

「行き場のない」保護犬と出会って

安東　素晴らしい。目標を持ったことが良かったんですね。

柴田　人間はね、「身のまわりのニンジン」が大事なんですよ、ほんとに。

安東　うちの母は今、サ高住にいるんですが、何をニンジンにすればいいのか考えてました。

柴田　旅行とか、誰それさんに会いに行くとか、そういうことが大事なんですよ。母は小学校の教員をしていましたし、退職後も学校で茶道を教えていたもんですから、教え子の子や孫まで知ってるんですよ。だから最期まで「教え子の孫を見に学校に行く」のが希望だったんです。

安東　そうですか。お父さんもお母さんも地域に生きてきたわけですね。

しばた・りえ

1959年、富山県生まれ。母の実家は八尾町の老舗旅館。明治大学文学部演劇学科を卒業後、劇団東京ヴォードヴィルショーに入団。1984年に脱退しWAHAHA本舗を旗揚げ、看板女優に。テレビドラマ、バラエティーなどでも活躍。

「私を産んで、育ててくれて、『人生の終い方』まで教えてくれるわけですよね…」

悲しい別れとして、ワンちゃんとの別れもあったんですか。

柴田　2019年に飼っていた愛犬を亡くしました。そのコはロケ中に拾ったコだったんです。ゴミ箱でビニール袋に包まれていた。声がする声がする、と言ってゴミを掻き分けて抱き上げたんです。後ろ足に先天的なハンディキャップがあってね、「それで捨てられたのか」と思いました。すぐに動物病院に行き、足を切断して3本足になりました。そのコが私の地方公演中に体調が悪化し、帰ってきた翌朝に高熱でバタッと倒れたんです。

安東　あら。それでどうされましたか。

柴田　獣医さんが病院で診ましょうと言ってくれたんですけど、「このコは捨てられていたから箱に入るのが嫌なんです。家で世話したい」と言い、点滴も家でしながら、おむつや流動食の世話も全部しながら見送りました。すべて世話をさせてもらって本当に親孝行なコでした。

安東　「させてもらって」という言葉、印象的ですね。

柴田　その後、コロナになり仕事も無くなり、また保護犬を飼って一緒に暮らしています。

安東　保護犬にこだわりがあるんですか。

柴田　そのコは行き場がなくて困っているわけでしょ。それって出会いですよ。運命ですよね。野犬にしたのは人間ですから、人間の責任として育てたいと思いますね。

安東　最後になりますが、人生のフィナーレ、どのように生きたいですか。

柴田　つくづく親というのはありがたい存在で、私を産んで、育ててくれて、なおかつ人生の終い方まで教えてくれるわけですよね。父や母の生き方を見て、どちらも最後は地域に貢献しながら生きたわけで、私もそのように生きたいと思います。

【インタビュー】シンガーソングライター

なぎら健壱さん

「人さまによく言われるような生き方をしなきゃあ…」

安東　なぎらさんは、いろいろ偶然が重なって売れていったという趣旨のことを語っておられますが、どんな偶然なんですか。

なぎら　気付いたら売れていたというか…。子どもの歌で「いっぽんでもニンジン」というのがあるんですが、「およげ!たいやきくん」のB面と言われますけど、じつは「両A面」なんです。「ニンジン」は「たいやきくん」（子門真人）の2年前の1973年にすでに出来てたので、まさか一緒に出るとは思ってもいませんでした。そしたら戦後最大のヒット（458万枚）でしょ。びっくりですよ。

安東　戦後最大も最大ですよね。

なぎら　レコード会社の人に最初、5000枚作ると言われたんです。「1枚1円として5000円ですか」って聞いたら「なぎらさん、全部なんて売れないっ!。売れて2000でしょ」って言われたんです。それが出してみたら、なんと戦後最大のヒットですよ。

安東　ほんとですね。いろいろありましたね。コロナではライブもできなかったですしね。

「コロナ禍では、ただ歩くしかなかった」

なぎら　ライブができないということは他の仕事もないということですからね。じゃあ飲みに行こうか、と言っても飲み屋もやってない。ただ歩くしかないですよ。さっさとではなく、だらだらちんたら、と。カメラ持って歩いてました。今年あたりから、ライブができない時にいろいろ考えていたのをやっていきたいなと思っています。

安東　コロナの時期にお友だちも亡くされたとか。

なぎら　そう。飲食店をしていた友だちでね。毎晩のように会って飲んだり、店が終わるとうちに来たり、家族で旅行したり、という付き合いでした。

安東　気持ちの整理が大変でしたでしょ。

なぎら　もう、考えないようにしました。「会えない」と「会わない」という言葉がありますよね。召されてしまえば物理的に会えませんよね。「会わない」というのは会えるんだけれども忙しかったり何かあったりして「会わない」ということで、そう思い込ませることにしたんです。そうしないとガクッときちゃいますから。長い間連絡してない友だちの

ように思おうとしたんです。会えるんだ会えるんだ、だけど「会わない」だけなんだ、と。

安東　喪失感をもった時にそう思い込むことは1つの心のあり方かもしれませんね。その思いを表わした歌があるんですか。

なぎら　「流れる人よ」という一昨年に出したアルバムに入っているものです。旅人とすれ違うという話なんですけど、人生のどこかで人はすれ違いながら生きている、いう歌ですね。

安東　その中に「ここまで下りてきな」って歌詞がありますね。

なぎら　はい。旅人に、辛かったら、そんなに歩かなくていいから「ここまで下りてきな」という感じかな。

安東　心に沁み入る歌ですね。

　命って有限なものですよね。そのあたりのことについて思うことはありますか。

なぎら　人は分け隔てなく、いずれ亡くなりますからね。その時にどれだけのものを残していけるかな、と思うんですよ。どこかにその人の思い出が残っていれば、まだその人は生きている、と思う。私は覚えているけれども子どもは覚えていない、忘れちゃってる、そういうときが「その人が亡くなる」ということなのかなと思いますね。

　それから天国と地獄があるとすれば、亡くなってから「あいつはいい奴だったよな」と言われてるとすれば天国だと思うんですよ。「あいつなんか死んでよかったよ」なんて言われてるとすれば地獄でしょ。そうだとすれば「人さまによく言われるような生き方をしなきゃいけない」と思いますよね。

「まだまだ最高があるんだぞ、と…」

安東　なるほど。なぎらさんご自身が人生のフィナーレを迎えるまでにやっておきたいことはありますか。

なぎら　楽しくないことは排除しようと思ってるんです。若い時は楽しくないこともやらなきゃならない場合もありますよ。糧にもなりますからね。だけど、ある程度トシをとったら、楽しくないことを排除しないとつまらない。それからトシをとって「今が最高」という人がいますけど、「まだ明日、やり方によっては最高がある」と私は思って生きていこうと思ってるんです。「まだまだ最高があるんだぞ」という思いでいきたいですね。

安東　最後はどんな思いで逝きたいですか。

なぎら　「楽しいことがまだまだあるのに」と思いながら笑って逝きたいですね。

安東　それって最高かもしれないですね。ありがとうございました。

「ある程度トシをとったら、楽しくないことを排除しないとつまらない」

なぎら・けんいち

1952年、東京・銀座生まれ。1970年に岐阜県の中津川で行われた全日本フォークジャンボリーに飛び入り参加しライブ盤に収録。「替え歌の名人」の異名も。俳優、タレントとしても活躍。東京の下町庶民文化への造詣も深く著書も多い。

安東弘樹　あんどう・ひろき

1967年、神奈川県生まれ。1991年にTBSに入社後、さまざまなテレビ、ラジオの報道やバラエティー番組を担当。現在はフリーのアナウンサーとして活躍。

※「My LIFE! My CHOICE!!」の放送時間は、TBSラジオは毎週日曜の午前5時より、ラジオ大阪は毎週土曜の午前11時15分より。番組公式HPはhttps://www.tbsradio.jp/mylife/
番組公式HP、日本尊厳死協会のHPから動画視聴ができます。